

生活科部門

総評

今回が初めてだったにもかかわらず、身近なものと自分との関わりを広げていこうとする意識が見える作品がたくさんあり嬉しく思います。自分の目で見て、感じたことを様々な形で表現したレ

ベルの高い作品も多く、子どもの力の大きさに驚かされました。興味が多様に広がることはとても素晴らしいことです。それを素直に表現すれば作品としてもよいものができ上がるのです。

文部大臣奨励賞

「元気にそだて ひよこのチョコちゃんたち」

岐阜県柳津町立柳津小学校
2年 光田 知世



ひよこさんの関わりの中で、ただ観察するだけでなくその成長を喜び、自分自身の生活を楽しむふくらましています。子どもらしい感性の光る作品です。

後援団体特別賞

全国小学校生活科
教育研究協議会
会長賞

わたしは ちいさなおかあさん

岐阜県岐阜市立長良西小学校
1年 若原 由佳

わたしは、おてつだいがないすきです。なつやすみは、じかんがたくさんあるので、おかあさんにおしえてもらっているいろいろなことにちようせんしたいと思います。

まとめ

いちばんたのしかったのは、ほうちようできたときです。わけは、うまれてはじめてやったからです。(中略)

せんたくものたみでは、おおきなものをたむのは、まえにできなかったけど、できるようになったので、たくさんおてつだいができてうれしかったです。



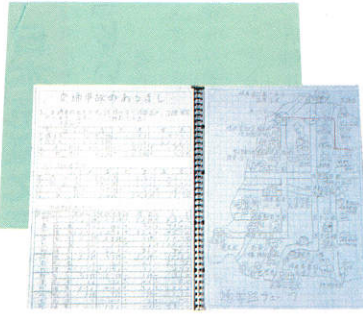
まい日励ましてくれるお母さんと、それにこたえようと一生けんめいがんばる知世さんの姿が目につく、家庭のあたたかさが伝わってきます。その中で自分の役割に気付き、自分の存在を大きくしていることがよく分かる生活に密着した作品です。

日本社会科教育
学会
会長賞

「車と交通安全」

岐阜県柳津町立柳津小学校
5年 高田 明子

研究のきっかけ：最近、交通事故がとても多い。なぜそんなに事故が多いのか、父の仕事（自動車販売業・ぶつかった車をもとどりにする仕事）を通じて車と交通安全について調べてみた。研究の方法：車の製造過程調べから、事故の起こる条件を、いろいろな角度（自動車側、歩行者側、気象条件など）で資料を集めてまとめる。研究のまとめ：実際にいろいろなことを調べてみると、交通事故を起こす原因がたくさんあることに気づいた。自分の命は一つしかないのに、自動車に乗っている人も、歩行者ももっと交通安全の意識を持つべきだと思った。



交通事故という、私たちの生活にもっとも近い問題を徹底的に調査し、自分の身の回りの危険区域を地図にしたりして、交通安全の大切さを訴えています。自分が納得するまで地道な調査をしているところが素晴らしいです。

美育文化協会 会長賞

「わたしのおかあさん」

徳島県徳島市立佐古小学校
2年 河原 由佳

小学二年生らしい素直でのびのびとした作品です。「お母さんが大好き」という感じが非常によく伝わってきます。自分なりの素直な視点で他者の意見にまじわされず、堂々と描いているところにも大いに好感がもてます。また、色使いや表現技法でも工夫がみられました。

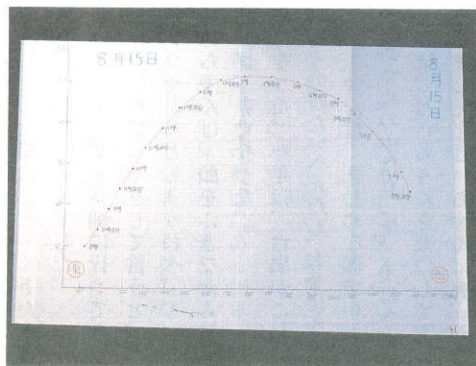


全国小学校理科研
究協議会
会長賞

「月の観測」

岐阜県柳津町立柳津小学校
4年 奥村 佳世

去年の夏休みのはかせ勉強で、高度計を作り、月の高さを測って、月の動きを観測しました。いつもなにげなく見ている月の動きにも、一定の決まりがあることに気がついて、楽しく観測できたので、月の高さとさらに横に動く角度も測って、もっとくわしく月の動きを観測することにしました。



とにかくこれは、努力賞ものです。夏休み中かけての月の観測・記録もすごいのですが、観測に使う高度計をはじめ、測定器も使い捨てカメラを利用して自作するなど、努力、工夫が感じられます。

※全国中学校理科教育研究会会長賞は、残念ながら該当者なし。来年に期待します。

「じいちゃんのリンゴ」

福島県安達町立下川崎小学校
三年 佐藤 美香

昭和五十八年十月、じいちゃんが東北の山に、リンゴの木を植えました。五年すぎて花がさき、リンゴ作りが始まりました。「東北のおいしいリンゴ」ができるようになって、今年は十年目です。きよ年の九月十八日、台風十九号がやってきました。あらしのような風がふき、雨がふりました。わたしは、こわくてこわくてたまりませんでした。お父さんもお母さんも、リンゴのことがしんばいでねむれないようでした。

次の日の朝、リンゴ畑へ行くと見ると、ふじがぜんぶ落っこちていました。いつもなら真っ赤な実がなるリンゴ畑が、でこぼこの山に見えました。「まったく、本当に。」

じいちゃんは落ちたリンゴをひろいながらおこっていました。わたしは、じいちゃんやばあちゃんが、あんなにたいせつに育てていたリンゴが落ちてしまつて、台風なんかこなればいいのに、とくやしくなりました。

じいちゃんは、毎朝、五時に起きてリンゴ畑へ行きます。七時までリンゴとりをし、朝ごはんを食べて、また八時には、畑へ出かけていきます。そして、十二時まで、ずっとリンゴとりをしています。リンゴ畑から帰ってくると、じいちゃんのこし

は、ねこのように丸くなっています。

「じいちゃん、こしもみやっかい。」

「うん、やってくれろ。」

わたしは、いつもねるときに、じいちゃんのこしもみをします。じいちゃんのこしの上ののって、りょう足でおもいつきりふみます。毎日、百回ぐらいやります。

日曜日には、家ぞくぜんいんでリンゴとりをします。今年のリンゴは、五月に気おんがひくかったので実が小さいです。でも、夏の間、暑い日がつづいたので、あまいリンゴになりました。今はつがるの実がたくさんなっています。

じいちゃんは、きかいで上のほうの実をとりま

す。わたしたちは、手のとどく所の実をとりま

す。みか、赤いからつてすぐとてはだめだぞ。青

いところがいいか、よく見てとれよ。日の当た

んねどこは青いんだから。」

「みか、リンゴとつときは、持ち上げるようにし

てとるんだぞ。」

じいちゃんとはあちゃんに教えられたとおりに、

一つずついいいにとつていきます。ずつと上を

むいてるので、首がいたくなつてきました。

(中略)

じいちゃんが帰つてきて、箱をどんどん重ねて

いきました。じいちゃんの顔は、あせでびっしょ

り。せなかもびっしょりでした。じいちゃんて、

ほんとうにはたらき者だなあ。夜、じいちゃんが、

「ああ、今日はつかつちやなあ。」

と、ため息をつきました。わたしが、

「じいちゃん、こしもみやる。」

と言って、こしの上ののると、目をつぶつて気持

ちよきそうです。

「美香、ありがと。」

わたしは、とてもうれしくなりました。

次の日、じいちゃん、雨の中をリンゴとりに行きました。七時にもどつてきたとき、じいちゃん

の服は、びしょぬれでした。

「じいちゃん、リンゴ畑に行つてきたの。」

と、わたしがびっくりして言う。

「リンゴやんねどしようねべ。」

じいちゃんは、顔をふきながら言いました。

「リンゴ、赤くなつた。」

「赤くなつた。今年は、台風がこねえどいいなあ。

ひろうのがたいへんだし、お金になんねがらな。」

じいちゃんは、まじめな顔でいきました。じい

ちゃんのつめの中は真っ黒。手はきずだらけです。

わたしは、じいちゃんを楽にしてあげたいなあ、

と思いました。じいちゃんは夜、かごいっぱい

にリンゴをつんできました。じいちゃんのこしは、

ふにやふにやになつていました。

「じいちゃん、こしもみすっかい。」

「うん、やってくれろ。」

じいちゃんは、こしもみをしているうちにねて

しまいました。じいちゃんつかれてるんだなあ。

あしたも、こしもみをしてあげようと思いました。

選評

一見、単調になりがちな題材に、ここまで強く魅きつけられたのは、所々にまじる「じいちゃん」の方言がそのまま綴られた言葉だつたように思います。リンゴ作りに励む「じいちゃん」の人間性が、読み手にもしみじみ伝わってくる作品です。

日本子どもの本学会 会長賞

人間の弱さ―「かあさんは魔女

じゃない」を読んで―

大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校
二年 宗村 友紀子

この物語の主人公エスベン、母親を魔女として焼き殺された。彼女は人々の体の悪い所を治してあげていたので、「悪魔の手先」になって、妖術で人の命まであやつる魔女だ」と密告されたのだ。エスベンは、魔女だと自白させるために真っ赤に焼けた鉄棒でたたかれる母を、拷問によって変わりはたてた傷だらけの母を、目の前で火の中に落ちていった母を、どんな思いで見たのだろう。きつとたえがたい悲しみとくやしさが、母親にひどい仕打ちを行った人々への憎しみ、怒りとなって頭の奥にくつきり焼きついたにちがいない。

私は初め、「魔女狩り」をする人々の仕打ちのひどさが信じられなかった。彼女を密告した張本人が、体の悪い所を治してもらった人々、である。なんて思わずなんだ、という気持ちを通りこして、あきれて物が言えないくらいだった。そしてはつきりとした証拠があるわけでもないのに、最初から魔女だと決めつけて、彼女の話聞こうなんていう気はまったくない。

一番許せないと思ったのは、かつて人々の心の安らぎの象徴として建てられた教会が、人々を清い生き方に導くはずの牧師が、指揮をとつてこのいまわしい魔女狩りを行っているということ。

何のために？

社会不安によって生ずる宗教的危機を乗り越えるためである。卑怯な手段だと私は思う。教会や牧師さんは、人々の不満をそらすただけに、自分の身を自分で守れないような人々、本来は守るべき人々を力で押さえつけるのである。そして次々と、尊い一人の生命を奪っていくことになるのだ。

でも、人々の不満をそらすばかりでは本質的な解決法になっていない。くさいものにはふたをしる」と言つた感じだ。またすぐわいてくる不満のために、次々と犠牲者が増えてしまう。このことこそ、イエスの教えから反した行為ではないだろうか。いくらキリスト教を守るためとはいえ、人々が人の命を平気で奪ってしまうことを、イエス様は喜んでおられないだろう。

それにしても、不満をそらす、という汚い考え方はどこからでてきたのだろうか。私の疑問に対して、母親を殺され、行き場がなくて困っているエスベンを助けた、ハンスという人物が答えてくれた。ハンスもまた、人々の体の悪い所を治せる力を持つていて、自分が焼き殺されるのは分かっている。でも、人々を助けることを選ぶ、そんな心の持ち主である。彼は、経験からこう言つた。

「人間は弱くておびえているからだ」

ばつと聞いて、「何におびえているのか」と不思議だつた。でも、読んでいくうちに、「自分自身の弱さからくる恐怖心」におびえているということが言いたいのだ、と思えた。「自分の弱さを認めたくないために、むりやりおびえのものをつくっているのだ」と。今、魔女狩りは行われていない。しかし、人々の内に潜む弱さもなくなったと言えるだろうか？ いや、そうではないだろう。今、私達の身のまわりになつて起こっている。

選評

「魔女狩り」をする人々の心理を、現代の「いじめ」の問題に結びつけて、身近な問題としてとらえ、うまくまとめています。